わかる授業、力のつく授業の創造

山形県村山市立楯岡中学校　今野 栄治

はじめに

本校は、平成15年度で創立53年目をむかえ、これまで一万数千名の卒業生を世に送り出している。その間、歴代教職員の情熱と確かな教育力、学区民の教育への高い関心と協力に支えられ、素直で明朗な生徒たちの活躍があり、教育活動のあらゆる面で幾多の輝かしい実績を示している。これらの歴史と伝統を踏まえながら、新しい時代の要請に応える学校づくりに創意と情熱をもってあたっている。平成14年度より、「学力向上フロンティアスクール」に係わる研究を3年間にわたり委嘱を受け、数学科や英語科における習熟度別学習及び選択教科指導の充実を軸とし、学力の向上に努めている。

学習指導要領では、選択教科の履修幅の拡大や総合的な学習の時間の新設とともに、基礎・基本の確実な定着がうたわれている。今こそ、教科指導の充実が、選択教科や総合的な学習の時間の成否の鍵を握っていると考える。そして、生徒たちには教科指導で身につけた力を選択教科や総合的な学習の時間で広げ、深めていくことが期待される。そこで、本校では昨年度までの2年間「わかる授業、力のつく授業の創造」を校内研究テーマに掲げ、指導と評価の一体化を重視しながら、実践を進めてきた。

〔実践紹介の主な内容〕

① 指導力の向上を図るため
　(1)内容のまとまりの重視と構成の工夫(単元構成　指導計画)
　(2)評価基準Bの立体化
　(3)具体的な方策例(自己申告制授業研究会　指導法強化週間　週案簿)

② 習熟度別学習の進め方とその現状
　(1)習熟度別学習の進め方
　(2)習熟度別学習の現状と課題

③ 自己理解や学習意欲等に関する実践例
　(1)補充・発展型の選択教科
　(2)学習カードや単元テスト取り組み表の活用

④ 学力向上の検証
　(1) 3つの力のバランス
　(2)教科学力の状況と改善策
　(3)「生きる力」の状況と改善策
　(4)「学びの基礎力」の状況と改善策

Ⅰ　研究内容と主な実践例

① 指導力の向上を図るため

以前の相対評価の時代では、学習者の評定判断は、指導者の力量とはほとんど関係なく、他の学習者との違いや集団の中での位置づけに重点がおかれて行われ、評定できるものであった。現在、目標に準拠した評価に完全移行したことで、学習者が獲得した学力はどの程度なのか、指導者はどれくらい学習者の学力を向上させることができたのか等、指導者の力量が明確に問われる時代になったわけである。本校では、指導者としての意識改革と指導力の向上が重要であると捉え、研究を実践中である。

(1) 内容のまとまりの重視と構成の工夫

内容のまとまり（単元や題材等）をどのように構成するのかをしっかりと捉え、授業構成を行っていく。内容のまとまり、すなわち指導計画と評価に関する資料を、本校では「マトリックス」と呼び、下記のような約束を設け、作成し、授業実践を行っている（**図表５－５－１**参照）。その際、学習指導要領や国立教育政策研究所の「平成13年度小中学校教育課程実施状況調査」の最終報告を熟読したり、学習者に内容のまとまりに関わる調査（レディネステスト）を行い、分析し、単元を構成している。

■図表５－５－１　マトリックスの構成と記述例（中学２年理科「身近な動物とその分類」）

主な学習活動 （　）内は時数	重点評価規準と方法 関心・意欲・態度	思考	技能・表現	知識・理解	評価基準 B
単元を通した各観点ごとの評価基準Bに値する姿	◎…	◎…	◎体の表面の様子や子孫の生まれ方などを調べ、動物の特徴をまとめた紹介カードを作成したり、発表することができる。	◎	主評価における基準Bに達している多様な生徒の姿
…	○… 主評価規準			・… サブ評価規準	○…
動物発表会を通し、生活場所の違いによって体の表面の様子など様々な点に違いがあることを見つける。（１）		○生活場所の違う２種類の動物名をあげ、体の表面の様子、運動器官などの違いを見いだす。（発表、カード記入状況）	・自分の調べた動物について、他の人にわかりやすく発表する。（発表、自己・他者評価カード）		※動物名をあげ、生活場所の違いをおさえ、次のような点のうち、自力で２点説明できる。 ○えら呼吸、肺呼吸の違い ○卵を産むことと子を産むことの違い ○ひれと足、翼の違い ○うろこ、毛などの違い
単元を通して身につけさせる内容と評価方法等			・動物紹介カードの完成 ・動物紹介発表会の発表状況 ・動物の仲間分け ・動物の仲間分け調べレポート ・単元テスト ・到達度診断テスト		

①マトリックスの特徴

・「基礎・基本の確実な定着」のために、単元としての目標を吟味し、再度、構成を考えることにより、一時間一時間の目標がしぼられること。（観点の重点化）
・重点化した観点を受け評価規準を文章化し、その評価方法を記載していること。
・その時間の評価規準を受け、どんな学習者の姿が評価基準Ｂなのかを想起し、文章化していること。
　※多様な学習者の姿を想起しているために、複数記載されている。これを「評価基準Ｂの立体化」と名付けている。
　※評価基準の設定にあたり、その条件や程度などを示し、より具体化していること。
・単元や題材などを通した評価方法やその内容を明示していること。

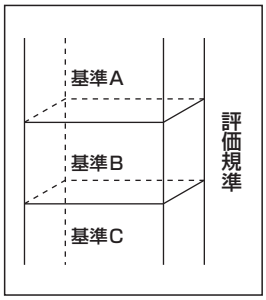
②マトリックスを用いた実践の成果

・単元や題材等を通して、学習者にどんな力を身につけさせたいかを明確に持つことができ、学習指導を継続することができた。
・課題をどのようにつかませ、学習者がどのように解決していくかを想起することで、どんな条件で、どの程度達成すれば基準Ｂとするのかを具体的に考えることができた。また、基準Ｂの姿に到達させるために、どのような支援が必要なのかという点においても、より具体的に立案でき、実行できた。
・毎時間における評価基準Ｂに値する多様な学習者の姿のうち、どの条件かを満たしていれば良いとした。この見取りと支援の積み上げで、学習者一人ひとりの学力を確かなものとしていくことができた。また、見取りや支援が十分できるように、自力解決の場を十分に設定することにも留意することができた。
・単元や題材等に入る前に、学習指導要領や国立教育政策研究所最終報告書を熟読し、学習内容を分析することが大切である。

(2) 評価基準Ｂの立体化

①評価基準Ｂの立体化の考え方

・３段階であることは、天井や底がないことをイメージしている。そのため、評価基準Ｂに到達している学習者の姿を吟味することで、評価基準ＡやＣが見えることとなる。本校が評価基準Ｂを吟味している理由はこの点からである。図で表せば、右のようになる。



②評価基準の立体化による主なメリット

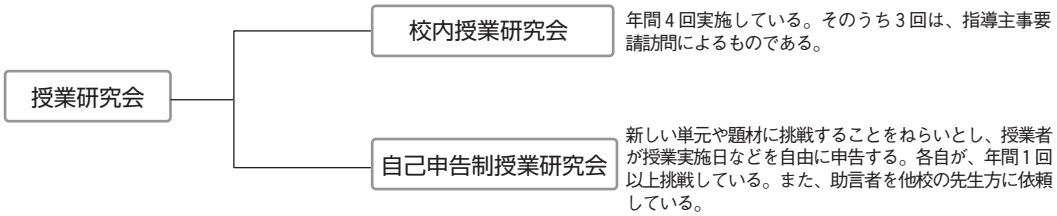
・多様な学習者の姿を想起することにより、学習者の立場になって、学習目標や課題などを検討することができる。
・担当している学習者全員が評価基準Ｂの姿に到達することを考えた場合、そのつまずきを予想でき、そのための解消法（支援策）が具体的に準備できる。

(3) 具体的な方策例

①授業研究会の実施と工夫

本校では、「校内授業研究会」と「自己申告制授業研究会」の２種類の授業研究会を実施している。どちらの授業研究会にしても、事前に教科部会による学習指導案の検討、そして事後研究会を行っている。事後研究会では、教科の枠を超えて、毎回熱心な話し合いが繰り広げられている。また、他校の先生方が参会することも多く、事後研究会でも共に勉強会を進めている。

自己申告制授業研究を実施し、３年目になった。定期的な授業研究会では、各教科の年間指導計画上、毎年同じ単元や題材があたりがちである。自己申告制授業研究会を行ったことで、「今まであまり挑戦できなかった単元の学習指導案が作成でき、財産が増えた」「生徒の弱点の内容をもとに、授業研究会ができた」「校内に○○



科が１人しかいないので、他校から専門の先生をお呼びして、助言していただきうれしかった」などの声があり、指導力向上の一助となっていると考える。

９月中の自己申告制の概要決定！

いよいよ自己申告制の授業研究会が開始されます。９月は、国語科と数学科が実践します。決定内容は、以下の表のようになります。

教科名	国　　語	数　　学
実施日	９月１８日（火）	９月１８日（火）
授業者	森先生・田中先生　TT 池　田　先　生	高　橋　先　生 寒　河　江　先　生
助言者	○○○○教頭	○○○○教頭
実施時間	４・５校時	４・５校時
事後研	６校時以降	６校時以降

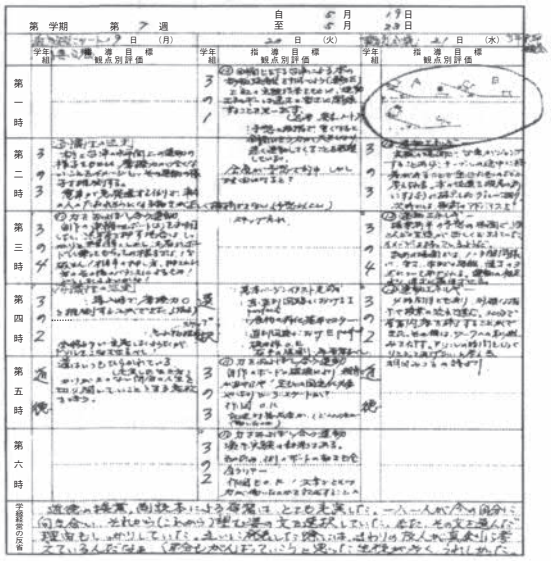
②指導法強化週間

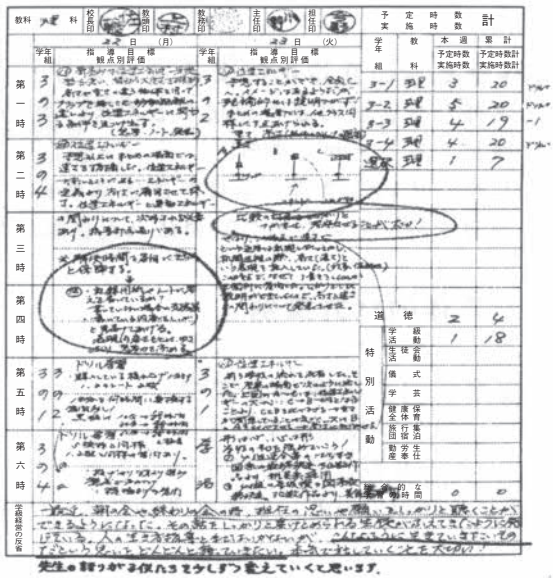
指導法強化週間は、学期に１回設定している。その期間は観点を決めて、学習指導を互いに参観し合い、基本的な指導力の向上に努めている。

③週案簿の活用

本校独自の学習指導に関する記録簿を利用している。指導学級、本時の評価規準とその観点や評価方法、指導の反省などを日々記録している。様式や記録状況は下記の**図表５－５－２**参照。

■図表５－５－２　週案簿の様式と記入例





② 習熟度別学習の進め方とその現状

現在、本校では数学科と英語科において習熟度別学習を進めている。どちらの教科も２クラスを３コースに編成し、確かな学力の定着や個々の学力の伸長に努めている。数学科の進め方を例に実践を紹介したい。(**図表５－５－３**参照)

(1) 習熟度別学習の進め方

現在習熟度別学習は全国的な広がりを見せている。学習者全員に確かな学力を保障していくためには、どのような仕組みが効果的であるかを考える必要がある。また、学習者の実態も十分に考慮すべきである。しかし、少人数制にすることで、必ず学習者一人ひとりの学力が向上していくとは限らない。どのようなシステムがより望ましいのかを考えている。数学科の進め方と各教科の学習効果について、下記に述べる。

○単元の目標は、習熟度別のコースに関わらず共通とする。

○数学科や英語科における習熟度学習では、２クラスを３コースに編成し、少人数制での授業を展開している。

例）数学科

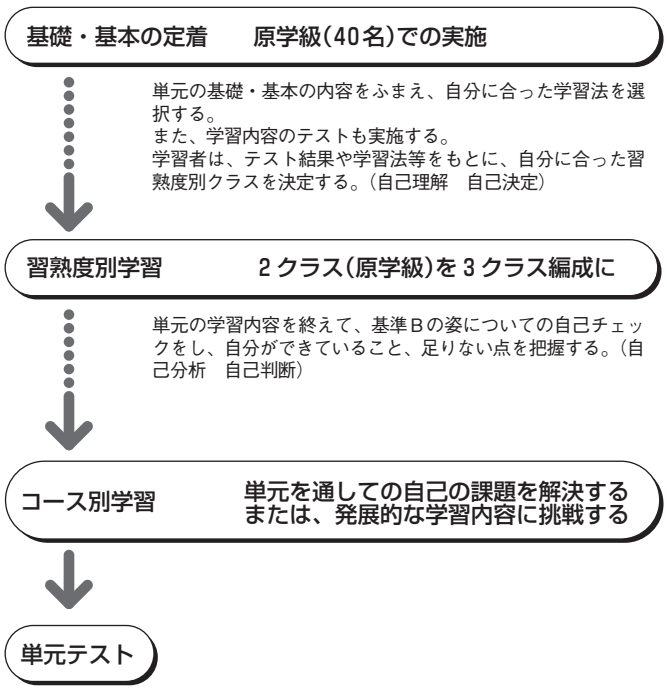
「原学級」「習熟度別学習」「コース別選択学習」を、学習内容に応じて実施していく。

HOPコース……基礎・基本を重視した学習を展開する。Ｔ・Ｔ指導

ＳＴＥＰコース…これまでの原学級の学習展開で学習展開する。

ＪＵＭＰコース…基礎・基本をコンパクトにまとめ、応用的な学習内容を取り扱う。

■図表５－５－３　本校における習熟度別学習の進め方(数学科)



※本校では、中間テストなどの定期テストは実施せず、単元などの内容のまとまりごとに単元テストを実施している。各教科担当者より、年間の単元テスト計画を提出することとし、年度はじめに学習者や保護者に年間テスト計画を配布している。また、学期末には、第○学期到達度診断テストを行い、学習内容の定着度や安定度を診断している。

(英語科においても、数学科と基本的なシステムは同様である。)

(2) 習熟度別学習の現状と課題

習熟度別学習を実施し、今年度で2年目になる。本校では、昨年度末に「総合学力研究会」の「基本調査」を受検したが、数学科や英語科における学習者の学力到達度状況や関心度等に関する結果の概要は、下記の通りである（**図表5－5－4**）。

これらの結果やその他の詳細な結果を分析してみると、次のような点があげられる。

・学習者に習熟度別コースを選択する場を設定したことで、その教科における学びを振り返り、自己理解を行ったり、深めたりすることができた。このことで、自分の学習状況をつかみ、より高い目標をめざし学習していくようになった。

・習熟度別学習のオリエンテーションを受け、学習進度や方法等に関する情報を得て、自己決定を行う場を設定した。自ら進んで学習していく姿勢が生まれ、主体的に学習を行えるようになった。

・習熟度別学習を展開したことで、学級の枠を超えた学習集団が生まれ、学習者は新鮮な気持ちで学習を進めている。また、座席決定においても共感的人間関係を十分に配慮するなどしていることで、気軽に教え合い学習が進められている。

・生徒指導面においても、学習者自身の存在感、そして人間関係等が整備され、徐々に成績向上につながっている。

・教え合い学習が成立している反面、解決場面での練り合いの場において、深まりや広がりの点に不十分さを感じている。

・習熟度別学習の、各コースの教材開発の点において、まだまだ研修不足である。どのコースにどんな教材が適するのかを今後研究していく必要性があるだろう。

■図表5－5－4　本校の「学力向上のための基本調査」結果の概要

（数　学）　◎…全体調査結果より優れていた内容　　●…全体よりやや劣っていた内容
関心・意欲・態度 ◎　与えられた条件から論理立てて結論を証明することは、おもしろい。 ◎　数学で学習した内容を、日常生活で用いている。 ●　複雑な計算をする時、文字を用いて簡単にする方法ができないかを考えてみる。
学習方法の実践 ◎　数学の問題が解けた時、別の解き方がないか考えるようにしている。 ◎　わからない問題や、テストで間違えた問題は、繰り返し練習して間違わないようにしている。

（英　語）　◎…全体調査結果より優れていた内容
関心・意欲・態度 ◎　英語の話が理解できない時には、聞き返そうとしている。 ◎　学んできた単語を積極的に使って、英語で話そうとする。 ◎　教科書以外にも英語の文章を読んでみたいと思う。

③ 自己理解や学習意欲等に関する実践例

本校では、学力向上フロンティアスクール事業を進めていくにあたり、『自分を知り、意欲を持って学び続ける生徒の育成』を研究テーマに掲げ、来年度初秋に本報告を実施する予定である。このテーマには、自己評価能力や学習意欲に関するキーワードがあげられる。学力を向上させるためには、指導者の指導力の向上の他に、学習者の情意面に関することも重要である。そこで、補充・発展型選択教科の在り方と教科指導における「学習カード」や「単元テスト」の取り組み表の例を紹介したい。

(1) 補充・発展型の選択教科

本校では、文部科学省の選択教科の趣旨を踏まえ、選択教科を「課題学習」と「発展・補充学習」の２種類の柱で構成している。「課題学習」は、指導者が大テーマを学習者に提示する。その後、全体オリエンテーション時に、学習者はどの大テーマを解決したいのかを選択し、学習が進められる。昨年度の主な大テーマは、次のようなものである。

例）社会科…最上徳内の紙芝居をつくろう！
技術・家庭科（技術分野）…卒業CDアルバムをつくろう！
保健体育科…オリジナル徳内おどりを創作しよう！

「補充・発展学習」について、おおまかな学習の流れは下記の**図表５－５－５**のようになる。

■図表５－５－５「補充・発展学習」の流れ

１．全体ガイダンス
○選択教科のねらい　○補充・発展型の選択教科について
○教科の選択にあたって　○質疑・応答

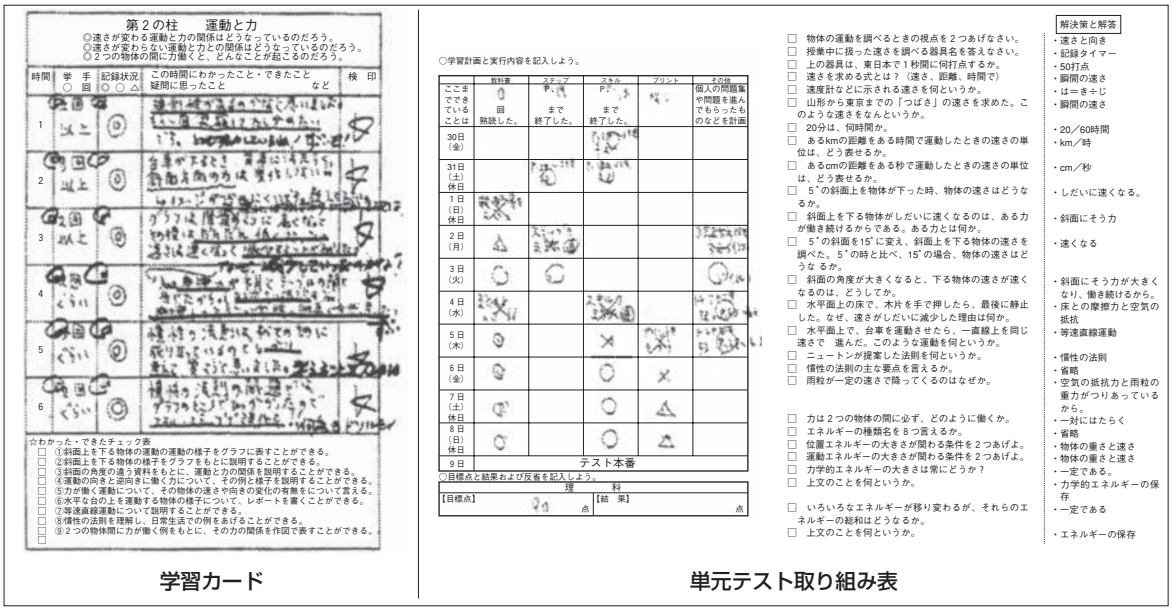
２．自己理解（教科選択）のための時間
○全国的な諸検査結果や学習に関する意識等の調査結果、教科書等を参考に、自分の学習や学力を把握する。（自己理解と学習への意欲づけ）
○得意（好き）な教科を選択し、発展的に取り組む分野や補充したい分野を決定する。

３．教科ごとに指導者と相談し、学習者自身が学習カリキュラムを作成
※指導者は教科の特性、学習が困難な分野、学習方法などの説明や講話をする。
※具体的な学習方法を提示する。（概念地図法など）
※開設講座の計画を提示する。
※無理なく、能力に合った学習カリキュラムを相談しながら、話し合いながら。

４．学習者は、学習カリキュラムに従って、学習
※学習者は、毎時間、自己評価し、カリキュラムの修正や補充を検討する。
※個人学習（学習カリキュラム）と指導者による講座制（定期的）の２本柱で。
※途中に、中間発表会を設定する。
※学習内容によっては、外部人材を活用していく。
※最後には、発表会を設ける。

(2) 学習カードや単元テスト取り組み表の活用

■図表５－５－６　学習カードと単元テスト取り組み表(中学３年理科　物理分野「運動とエネルギー」の一部)



第２の柱　　運動と力

◎速さが変わる運動と力の関係はどうなっているのだろう。
◎速さが変わらない運動と力との関係はどうなっているのだろう。
◎２つの物体の間に力働くと、どんなことが起こるのだろう。

時間	挙手 ○回	記録状況 ◎○△	この時間にわかったこと・できたこと 疑問に思ったこと など	検印
1	以上	◎		
2	以上	◎		
3	以上	◎		
4	ぐらい	◎		
5	ぐらい	◎		
6	ぐらい	◎		

☆わかった・できたチェック表
- □ ①斜面上を下る物体の運動の運動の様子をグラフに表すことができる。
- □ ②斜面上を下る物体の様子をグラフをもとに説明することができる。
- □ ③斜面の角度の違う資料をもとに、運動と力の関係を説明することができる。
- □ ④運動の向きと逆向きに働く力について、その例と様子を説明することができる。
- □ ⑤力が働く運動について、その物体の速さや向きの変化の有無を説明できる。
- □ ⑥水平な台の上を運動する物体の様子について、レポートを書くことができる。
- □ ⑦等速直線運動について説明することができる。
- □ ⑧慣性の法則を理解し、日常生活での例をあげることができる。
- □ ⑨２つの物体間に力が働く例をもとに、その力の関係を作図で表すことができる。
- □

学習カード

○学習計画と実行内容を記入しよう。

	教科書	ステップ	スキル	プリント	その他
ここまでできていることは	回 熟読した。	P まで 終了した。	P まで 終了した。		個人の問題集や問題を進んでもらったものなどを計画
30日(金)					
31日(土)休日					
1日(日)休日					
2日(月)	△				
3日(火)	○	○			○
4日(水)					
5日(木)	○		×		
6日(金)	○		○	×	
7日(土)休日	○		○	△	
8日(日)休日	○		○	△	
9日	テスト本番				

○目標点と結果および反省を記入しよう。

理科	
【目標点】 点	【結　果】 点

- □ 物体の運動を調べるときの視点を２つあげなさい。
- □ 授業中に扱った速さを調べる器具名を答えなさい。
- □ 上の器具は、東日本で１秒間に何打点するか。
- □ 速さを求める式とは？（速さ、距離、時間で）
- □ 速度計などに示される速さを何というか。
- □ 山形から東京までの「つばさ」の速さを求めた。このような速さをなんというか。
- □ 20分は、何時間か。
- □ あるkmの距離をある時間で運動したときの速さの単位は、どう表せるか。
- □ あるcmの距離をある秒で運動したときの速さの単位は、どう表せるか。
- □ 5°の斜面上を物体が下った時、物体の速さはどうなるか。
- □ 斜面上を下る物体がしだいに速くなるのは、ある力が働き続けるからである。ある力とは何か。
- □ 5°の斜面を15°に変え、斜面上を下る物体の速さを調べた。5°の時と比べ、15°の場合、物体の速さはどうなるか。
- □ 斜面の角度が大きくなると、下る物体の速さが速くなるのは、どうしてか。
- □ 水平面上の床で、木片を手で押したら、最後に静止した。なぜ、速さがしだいに減少した理由は何か。
- □ 水平面上で、台車を運動させたら、一直線上を同じ速さで　進んだ。このような運動を何というか。
- □ ニュートンが提案した法則を何というか。
- □ 慣性の法則の主な要点を言えるか。
- □ 雨粒が一定の速さで降ってくるのはなぜか。

- □ 力は２つの物体の間に必ず、どのように働くか。
- □ エネルギーの種類名を８つ言えるか。
- □ 位置エネルギーの大きさが関わる条件を２つあげよ。
- □ 運動エネルギーの大きさが関わる条件を２つあげよ。
- □ 力学的エネルギーの大きさは常にどうか？
- □ 上文のことを何というか。

- □ いろいろなエネルギーが移り変わるが、それらのエネルギーの総和はどうなるか。
- □ 上文のことを何というか。

解決策と解答
- 速さと向き
- 記録タイマー
- 50打点
- 瞬間の速さ
- は＝きゃっじ
- 瞬間の速さ
- 20／60時間
- km／時
- cm／秒
- しだいに速くなる。
- 斜面にそう力
- 速くなる
- 斜面にそう力が大きくなり、働き続けるから。
- 床との摩擦力と空気の抵抗
- 等速直線運動
- 慣性の法則
- 省略
- 空気の抵抗力と雨粒の重力がつりあっているから。
- 一対にはたらく
- 省略
- 物体の重さと速さ
- 物体の重さと速さ
- 一定である。
- 力学的エネルギーの保存
- 一定である
- エネルギーの保存

単元テスト取り組み表

上の図表に示す「学習カード」や「単元テスト取り組み表」を活用することで、以下のようなことがわかってきた。

・単元を見通すことができるように学習カードを提示することで、学習者一人ひとりが学習進度を確認していくことができた。また、単元末における単元テストがいつ実施されるかも把握できた。

・学習カードの記入を継続していくことで、短時間に記入を終え提出できるようにまで至っている。学習の振り返りは記述しているが、学習のポイントがずれていないか、何を努力できたのか、疑問に思ったことなども自由に書かせている。毎時間40名全員を見取ることができないので、カードを通して、学習者全員とのコミュニケーション活動を進めている。次時までに指導者が目を通し、一人ひとりのカードにコメントを書く。学習者は、授業前にカードが配布されると、どんなコメントがあるのかを楽しみにしていることがうかがえる。

・学習カードに記入されている内容をもとに、不安な点は導入で確認したり、疑問を取り上げたりして、授業改善を進めていくことができる。カード記入により、自分の書いた内容が取り上げられる喜びを味わっている生徒が多い。そのため、学習意欲も向上している。

・小単元ごとのまとまりを示し、最後に主な評価規準を公開している。このことで、学習者は、何がわかるようになればよいのか、何ができるようになればよいのかがわかり、よりわかろうとしたり、できるようになりたいとする学習姿勢が向上してきている。

・単元テスト取り組み表では、特に知識・理解に関する学習内容をチェックリストとして示すことで、学習者は学習のポイントを確実に把握しようとする。その結果、好成績を維持するに至っている。

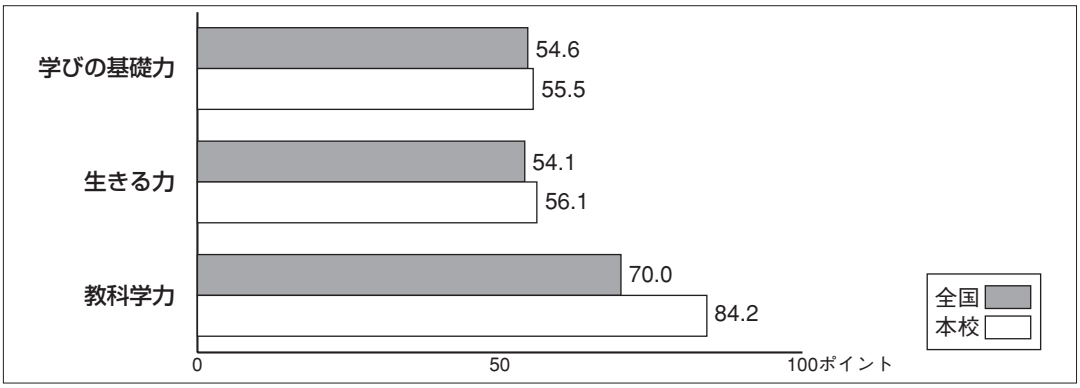
④ 学力向上の検証

これまで、本校の実践例を紹介してきたが、この実践の成果の可否を見定めるには、客観的なデータが必要となる。しかも、より客観性の高いデータとなる全国規模の諸検査が有効な手立てとなる。そこで、「総合学力研究会」が実施した「学力向上のための基本調査」をもとに、本校の学力を分析し、指導を振り返ることにした。

この調査は、「確かな学力」を「教科学力」、「生きる力」そして「学びの基礎力」の3つの観点から総合的に捉える調査仮説に基づいて設計されている。尚、「教科学力」「生きる力」「学びの基礎力」の内容については、以下に漸次紹介していく。

(1) 3つの力のバランス

■図表5－5－7 「教科学力」「生きる力」「学びの基礎力」のバランス

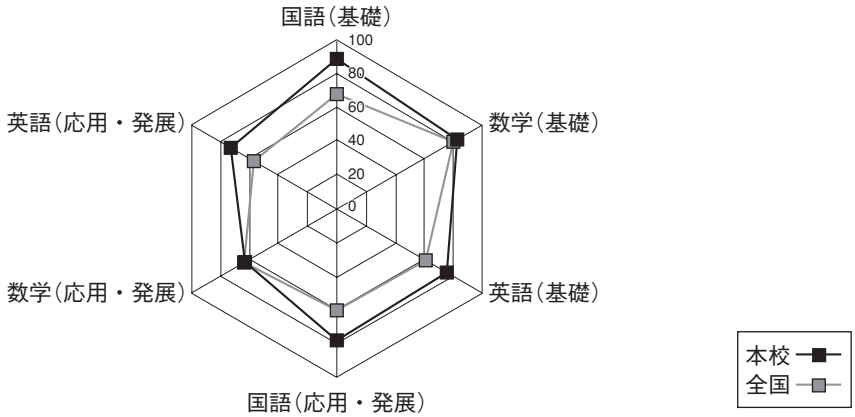


上の図は、それぞれの観点における本校生徒の平均スコアと全国平均スコアとの比較を表したものである。ただし、教科学力に関しては、国語、数学、英語の3教科の結果をもとに算出した平均値を用いている。

3観点ともに、全国平均スコアを上回っている。特に、教科学力に優れていると言える。これは、前述した指導力向上の取り組みの成果であるとも言える。「生きる力」や「学びの基礎力」では教科学力ほどの成果は見られないが、予想以上に良い結果であった。

(2) 教科学力の状況と改善策

■図表5－5－8　教科学力の状況



教科学力では、国語と英語において、基礎および応用・発展問題ともに高い達成率を示した。これは、日常の学習活動の充実が大きな理由にあげられる。学習指導上における指導と評価の一体化、すなわちPDCAがしっかりと機能していることによると考えられる。各単元や題材のマトリックスを充実させ計画をしっかりと行い、学習指導してきた結果であり、習熟度別学習という指導形態の工夫も好成績をもたらしていると推測する。また、読書活動の盛んな点もその理由にあげられる。朝の読書活動の実施、そして図書館(本校ではリソースセンターと名付けている)からは年間平均一人四十数冊の本が貸し出しされている。数学においては、基礎問題の全体平均到達率が80％を超えているためか、全国平均到達率をやや上回っている程度にとどまっている。そこで、より学習者一人ひとりに力をつけていこうと考え、先に示した習熟度別学習の実施を開始している。少人数制とし、個に応じたきめ細やかな学習指導を進めている。

教科学力の調査結果をもとに、次のようなことを試みている。

学習者やその保護者への成績表の通知についてである。以前は、相対評価であったことから、学習者の得点および学年における平均点を明記していた。現在は、標準点や目標点を明記し通知している。これらの得点については、以下のような独自の計算式を立ててみた。詳細については今後検討の余地が十分にあるものの、学習者にとっては全国を意識した数値であるといえる。標準点や目標点の算出は以下のような方法である。

例）数学　図形領域における標準点の算出

必要なデータ	・内容領域「図形」に関わる調査全国平均達成率	75.3％
	・内容領域「図形」に関わる調査本校平均達成率	80.2％
	・内容領域「図形」に関わる調査全国偏差値55に値する達成率	83.2％
	・校内で実施した平均達成率	68.8％

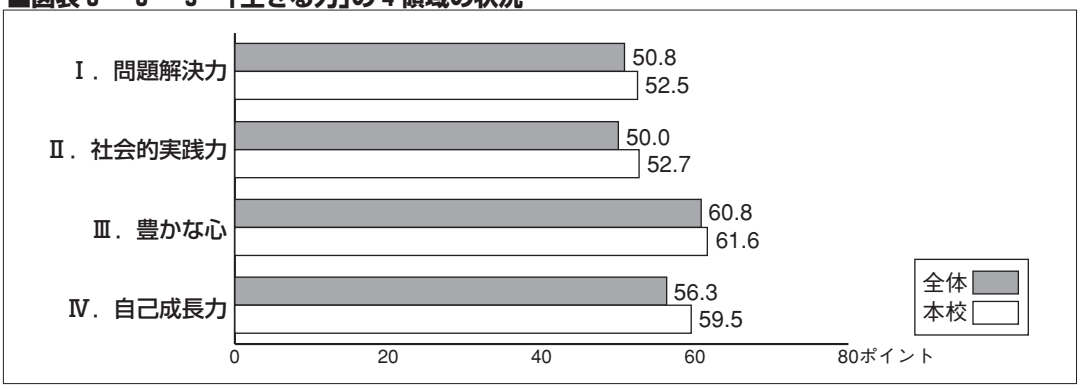
※　標準点　＝　68.8　＋　(75.3　－　80.2)

※　目標点　＝　68.8　＋　(83.2　－　80.2)

若干の補正値を用いる場合も必要である。

(3)「生きる力」の状況と改善策

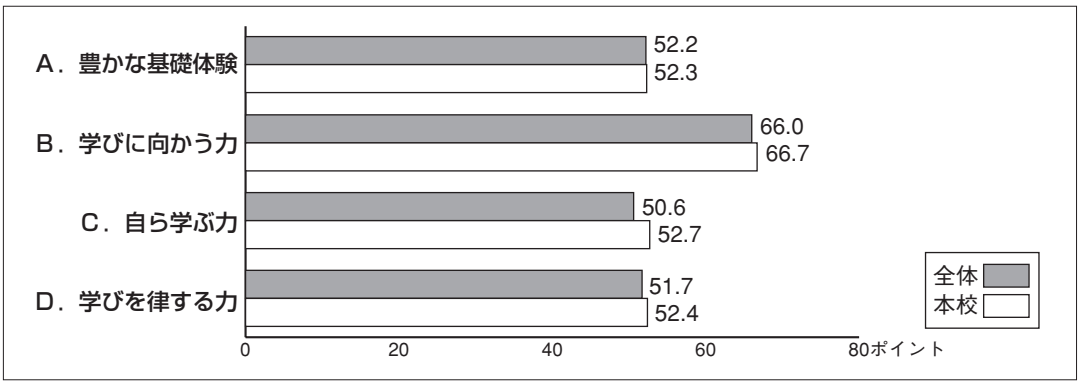
■図表５－５－９　「生きる力」の４領域の状況



図表５－５－９に示すように、「生きる力」では４つの領域ともに、全体平均スコアを上回る結果であった。「生きる力」の小項目ごとにおける調査結果については特に、「Ⅰ．問題解決力」に関する10項目の設問中３項目が非常に優れていた。「課題設定力」、「論理的思考力」、「メディアリテラシー」である。これらの点においては、総合的な学習の時間の充実が大きな要因にあげられそうである。本レポートには、総合的な学習の時間に関わる実践はあげていないが、３カ年間を見通した学習計画と実施を試みている。その反面、気になる点は「Ⅳ．自己成長力」における「自己評価力」であった。どんなことが自分に向いているのかなど、自分自身の良さや改善点などをしっかりと把握できていない。「自己評価力」を育成していくことは、学びを充実させていく上で不可欠な力である。様々な場面での自己評価や相互評価などを工夫した実践が望まれる。

(4)「学びの基礎力」の状況と改善策

■図表５－５－10　「学びの基礎力」の４領域の状況



「学びの基礎力」では、とりわけ「C．自ら学ぶ力」の中の「学習スキル」、「学習定着の方略」、「自宅学習習慣」において良好だった。「学習計画力」においては、全国平均値程度である。この力を伸長させていくために、前述した選択教科における補充・発展学習で、学習者自身による学習カリキュラムを作成する時間を設け実践中である。その他に、「A．豊かな基礎体験」における「直接体験」でやや全体平均スコアより下回った。この質問内容を検討してみると、家での決まった仕事や美術館、博物館、舞台見学等の経験不足があげられた。手伝いに関しては、

家庭との関わりがあるが、学級経営において、一人一役の推進などで自己存在感を味わわせていくことが大切であろう。

学力が身についているのかを捉える場合、教科学力による調査が必要である。しかし、「確かな学力」は、教科学力のみで捉えてよいのだろうか。「確かな学力」のキーワードに執着しすぎ、「生きる力」が希薄になりつつある。全国的な諸検査の実施を通して、どんな力が身についているのか、どんな力が不足しているのかなどを把握し、その改善に努めていくことが大切であろう。また、全国的な調査の継続的な実施により、学習者の変容を的確に捉え、改善していくことも大事なことである。絶対評価になり、妥当性や客観性のついて問われる時代。全国区を意識し、教育していくことが必要である。

Ⅱ　成果と課題

本校では「わかる授業、力のつく授業の創造」（指導と評価の一体化を通して）のテーマを設定し、様々な取り組みを行ったが、基本的なねらいは指導案の形を整え、吟味することによって、指導者として授業を構成する上で必要な要件を提示し、研修してもらうことにより、教員の授業力の向上を図ることである。授業を創造するにあたって押さえなければならないことは学習指導要領、国立教育政策研究所の評価資料等であり、単元や題材等としての目標を吟味し、一時間一時間を構成することである。また、一人ひとりの学習者をしっかりと見取り、支援していくための評価基準Ｂを設定し、評価するための具体的な方策等を提示した。意欲的に授業研究会を行えるように、自己申告制授業研究会を実施した。日々の実践に関しては、週案簿の活用を考え、指導の向上を図った。

①成　果

・改訂に伴い、学習指導要領や国立教育政策研究所資料などを新たな気持ちで熟読することで、単元や題材等のまとまりを通して、四（五）観点ごとに身に付けさせたい力や望ましい学習者の姿を明確にもてるようになった。このことで、学習のゴールを見据えた効果的な学習指導を行うことができた。

・単元や題材等を通した各観点ごとのゴールをもとに、単元や題材等を効果的に構成していく必要を強く感じた。そのためには、毎時間の学習課題を絞り込むことが大切である。また、課題の絞り込みにより、その学習時間における重点的な観点が見えてきた。

・毎時間の評価規準を検討する上で、学習者がどのような資料や思考などで自力解決していくのか、解決していく上でどんなつまずきが考えられるのかなどを予想することで、評価基準Ｂに値する学習者の姿が多様に想起できた。また、そのための学習者への支援策を具体的に持つことができ、学習指導にあたることができた。

・自己評価カード等では、授業に対する満足度が上がり、各学年ともに着実に学力の向上が諸検査の結果に表れてきた。

・研究授業等で養われてきた実践力が、日々の授業でも定着されてきている。その証として、週案簿への評価規準や評価基準、指導の反省の記入があげられる。この記録の蓄積をマトリックスに書き換え、より望ましい指導計画となってきている。

・習熟度別学習を実施したことで、以前の学級単位での学習と比較すると少しずつではあるが、効果があがっていることが諸検査結果より明らかになっている。

・選択教科における補充・発展学習では、学習者によるカリキュラム作成の場がとても重要である。全国的な諸検査などをもとに、自己の学習状況を振り返ることで、自己理解が深まり、自分自身の良さを知り、改善点を明確

に持てるようになった。そのため、よりわかりたいとか、できるようになりたいという意識が強くなり、学習意欲が向上してきた。

・学習カードやテストへの取り組み表の活用では、評価規準の公開により、何がわかるようになればよいのか、何ができるようになればよいのかというゴールをしっかりと見据えた学習を進めていくことができた。また、単元構成の工夫等により、学習目標の絞り込みが徹底し、学習者にとって「わかった」「できた」という満足感や達成感を味わわせることがことができた。このような毎時間の積み上げにより、学習に対する意識が高まったり、指導者との信頼関係もより良いものになっている。

②課　題

・単元や題材等に関する事前調査により生徒の状況をよく把握することで、より効果的な単元構成ができ、学習者一人ひとりに確かな学力を保障することができるだろう。また、事前調査は、各観点ごとに把握したい。

・作成したマトリックスをもとに、学習展開を行った際、その学習指導を反省し、その気づきを週案簿に記録する習慣化を図るとともに、実施状況に基づきマトリックスの内容の修正や蓄積を行っていく必要がある。

・多様な学習者の姿を想定した実践を積み上げていくためには、学習指導要領などの土台となる資料をしっかりと読みこなすことや教材研究の充実が不可欠である。日々の自己研修を大切にしていく必要がある。

・習熟度別学習においては、少人数制をどのように行うべきかを検討する余地がある。学習者一人ひとりがどのコースを選択していくのかをしっかりと見定めていけるような手だてが必要である。そのためには、学習者の自己理解の深まり方や指導者の単元構成、教材開発をより研究すべきである。

・選択教科の補充・発展学習においては、学習者一人ひとりのカリキュラム作成の場での見取りや支援の充実が必要である。カリキュラム作成そのものが学びの場であり、より具体的で焦点化したものを作成できるようにしていきたいものだ。また、学習者一人ひとりの学びの場においては、一時間一時間が個々にとって有効な時間であるように支援できるような方策を考えていきたい。

・現在、学力向上フロンティア事業を受け、『自分を知り、意欲を持って学び続ける生徒の育成』を研究テーマに掲げ、研究を進めている。自己評価能力の育成や学習意欲に関することがキーワードとなる。上記にその一端を紹介したが、まだまだ研究の余地があり、さらなる研究や実践が必要である。

おわりに

学力を向上させていくためには、学校として学力をどのように捉えているかが大切である。本校での学力向上フロンティア事業への取り組みでは、「学力」を吉崎静夫日本女子大学教授の考え方に基づいて捉えている。そして、その考えをもとに、いかに現場で実践し、成果をあげていくかが大きなポイントになっていく。プロ意識をもった指導者、指導力のある指導者が、学習者との信頼関係を深め、確実に学力を向上させていく。そんな指導者になっていけるように日々の授業を大切にしていきたい。本校の研究には、まだまだ検討したり、実践を積み上げていかなければならない部分が多い。今後も、全職員で力を合わせて努力していきたい。

最後に、本校の校舎に「豊かな夢を描く生徒」「確かな学びを育む学校」の２枚の看板が掲げられている。毎朝、その看板を目にしながら、勤務を開始している。